

日常の悩み解決のため『リボーン側溝』の発明家に ライセンス展開の経験から自身も知財活用支援へ

事業内容

1995年創業

「リボーン側溝」に関する知的財産権のライセンス事業

知的財産権と内容

特許第5172193号	U字溝の改修方法
商標第4121733号	リボーン側溝
商標第4121734号	リボーン蓋
商標第6020291号	リボーン側溝（立体商標）
意匠第1339846号	溝ぶた

他 商標権4件、意匠権1件

(2025年10月現在)

ACTIVITIES & ACQUISITION IS INTELLECTUAL DATA



代表取締役 平田 純一さん

個人のアイデアが特許技術となり 法人化のきっかけとなった

当社は「知的財産権のライセンス活用」をメイン事業とする企業である。創業のきっかけは、平田代表が自宅前の側溝の老朽化による騒音に悩み、美濃加茂市役所に相談したことだった。当初は分析の結果、改善は不可能との回答を受けたが、丁度その時土木課に在席していた知己の職員に専門的な内容も踏まえ改めて原因を説明してもらい、自ら改善案を探っていったという。その中で「蓋と溝の隙間によるガタつき」が騒音の要因だと気付いた平田代表は、側溝の受け部分と蓋の部分を「R（アール）型」の曲面にすることで、荷重が真下から斜めにかかるようになるとともに、隙間に砂などが入ることがなくなり、騒音を軽減できるのではないかと考えた。また、この方法であれば従来のコンクリートの厚みでも、車両を支えるために必要な「耐荷重25t」という基準をクリアすることが可能となる。こうして再びアイデアを自治体に提案したところ、無事に受け入れられるとともに、『リボーン側溝』という名の特許技術へと成長を遂げた。その後は業界内でも画期的な発想として一目置かれ、「技術を使わせてほしい」との問い合わせが相次いだことから、事業化および法人設立を決意したそうだ。平田代表は「自身のアイデアが広く役立ち、権利にもなるのか」と驚いた」と当時の心境を語った。

過去の苦い経験から特許の重要性を意識し 代表自ら出願手続きの全てを担当

実際の特許取得は『リボーン側溝』が初めてとなったが、以前にも、特許の重要性を感じさせられる出来事があったという。昔、近隣で子どものゲームセンター利用が禁止されたという話を聞いた平田代表は、「自宅で同じような体験ができれば」と、大手ゲーム会社に『家庭用ゲーム機』の企画を持ち込んだ。この企画書は却下されたものの、その後、似たようなゲーム機が同会社から発売されてしまう。しかし、何も権利を有さない平田代表はなす術がなかった。これにより平田代表は、「特許のように確かな証明となるものがなければ、自分の権利を主張することが難しい」という学びを得たそうだ。そのため、『リボーン側溝』をひらめいた際には、すぐに特許の取得を検討。また、先行事例の調査や書類の作成、申請手続きまでの全てを自らで行うなど、知財に対する造詣を深めた。そのノウハウを活かし、現在当社では知財の取得・活用やライセンスマッチングなどの「知的財産活用支援サービス」も展開している。

ライセンス事業のパイオニアとして 発明者の育成も含めた知財活用の可能性を模索

当社は創業から今に至るまで、合計で104社もの企業とライセンスアウト契約を行い、現在も57社がライセンスを利用している。契約時のインシャルフィーと継続

的なロイヤリティによって、独自の収益モデルを構築しているのも特徴だ。そのため、税務署にも珍しい業態だと興味を持たれ、専用のデータベースを作らせてほしいと言われることもあった。平田代表はそんな知財活用のパイオニアとして、「知財を担保に融資が受けられるような体制を整えたい」との展望も抱いている。また、人生経験が豊富なシニアや、不登校の子どもなど、幅広い方を対象とした「発明教室」の開講も検討しているという。新たな発明者を育て、より効果的な知財活用環境を作るべく、今後も邁進していく方針だ。

知財取得・活用における苦悩



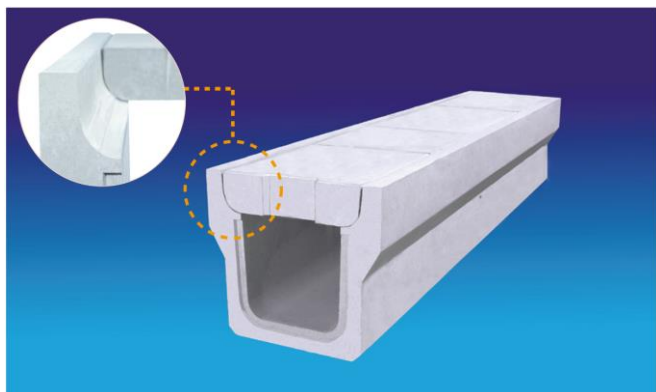
特許取得に関してはさほど苦勞しなかったという平田代表だが、ライセンスビジネスを行う上で、当社と契約をせずに模倣されてしまう事案には相当悩まされたという。ライセンスビジネスとして展開している以上、ロイヤリ

ティ未払いの企業を見つけた場合はすぐに訴訟を行うなど、毅然とした態度で対応してきた。しかし、勝訴しても模倣企業が資金難により倒産してしまい、損害賠償額を受け取れないケースもあり、知財訴訟の大変さを痛感しているようだ。また、裁判では専門的な内容に触れることもあるが、複雑な内容を説明しづらいという難しさもあるという。

知財取得を目指す経営者へのメッセージ

注目!

「全ての発明は失敗から始まる」と平田代表は話す。「失敗するということは、前例のない技術だという証明のようなもの。自らの視点を信じ、恐れずにトライしてほしい」と。また、「“不可能は可能になる”と、数々の経験を通じて感じられた。『知財立国』を目指し、多くの人々が発明者として活躍できるような世の中になれば」とも併せて語った。



『リボーン側溝』は、画像のように受け&蓋部分が「R」になっているのがポイント



実際に施工された『リボーン側溝』の様子。しっかりとした安定感も窺える



知的財産活用のポイント

柔軟な姿勢で、理知的に学ぶ 大きな目標に向け、着実に努力し続ける姿

「前例に従うことも大事だが、自由な発想を生み出すためには、一度先入観や雑念を払い、無心になることも必要だ」と平田代表は話す。そういう意味では、「特許は芸術と根本的に同じ」であるとも考えているという。また、自身とは逆に「模倣する

側」の気持ちを探るべく、東京大学の教授に師事して「模倣学」を専攻し、修士論文を執筆した経験もある。『リボーン側溝』の開発も、そういった平田代表の探求心や、問題を具体的に解決したいという熱意に基づいて成功したことがうかがえる。疑問が生まれるたび常に理論的に追究し、その実態を掴もうと努力し続ける姿勢が、現在のライセンス事業へと繋がった。

COMPANY DATA

取材：2025年10月

企業名：有限会社リタッグ 所在地：岐阜県美濃加茂市本郷町9-9-28 電話番号：0574-24-0318

URL：<https://www.retug.jp/> 創業：1995年 資本金：300万円 従業員：12名

